

(3) 中世の遺構と遺物について

中世遺構について 中世の遺構は、確認された18棟の建物の外に円形土坑、井戸、区画溝、溝が見られた。建物については、次節で触れるのでここではそれ以外の遺構についてまとめたい。

円形土坑の内部からは多数の焼成を受けた河原石や凝灰岩の加工品が出土した他、不明鉄器や埴埴、わずかながら鉄滓も出土している。遺構は中央に不定形の土坑があり、北側は2ヶ所において床面が焼けたところが見られた。この状況から単なるゴミ捨て場とは考えられず、また建物群や区画溝などからフィゴの羽口や鉄滓が多数出土していることなどを考えあわせれば、鍛冶に関連する遺構と見ることも可能と思われるが、類例がなく現時点での判断は控えたい。

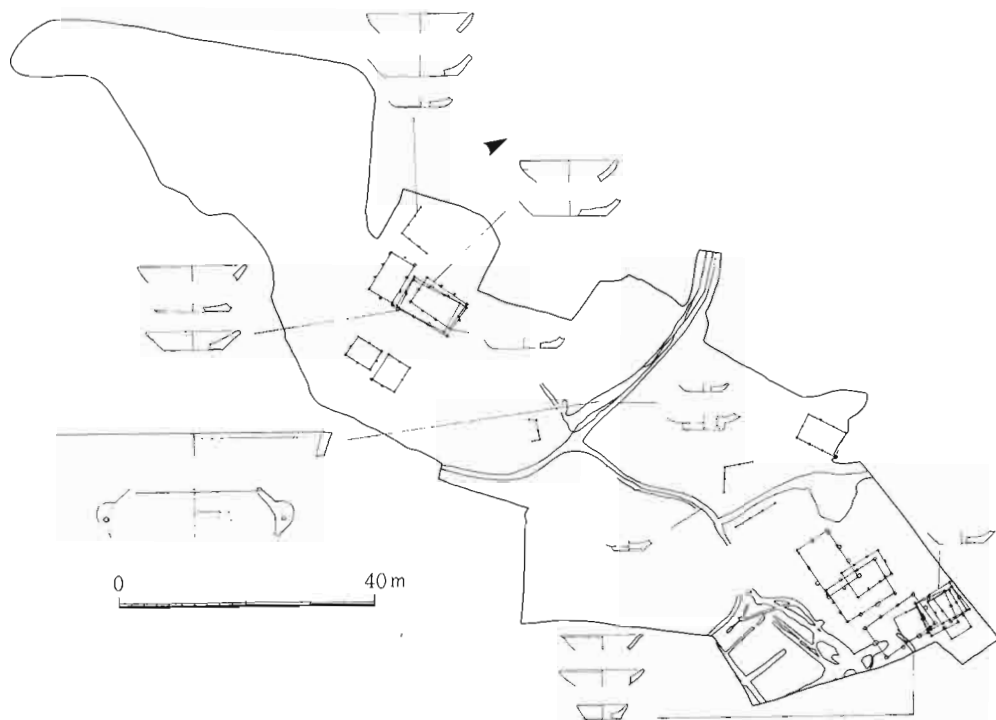
井戸は土器が出土していないため時期の決め手を欠く。しかし、井戸内部からは図示していないが1点のみ、円形土坑にみられるような凝灰岩質の用途不明の石器などが出土している。こうしたことに加え、調査区域内で近世以後の建物群が存在していないことや、中世には石組井戸の例が増えていること、^(註1)集落の一角に井戸を掘る中世村落の例などから考えてこの井戸は中世の時期と考えるのが妥当と思われる。

区画溝は、建物に切られた溝を除いて、ほとんどが建物と軸の方向を同じくし、柱穴も区画溝内に見られるものは非常に少ないことから、両者が有機的関係にあったことが推測される。また、現在この台地上では調査区周辺西側に見られる水田を除くと畑作が中心となっている。こうしたことから、この遺構の性格は水田と関係づけるよりも畑作と関係した遺構として考えたい。

2号溝は、現在の水田に利用されている水路とほぼ同じ位置に存在し、溝の埋土下部は砂層を形成し、溝底には何回かの掘削を受けたとおもわれる痕跡もみられた。この溝の北側にはため池があり、これは第88図の明治28年の地籍図にも見られ古くから存在していたことが確認される。第87図の江戸時代絵図や明治時代の地籍図から田迎、東又といった小字付近より水田が広がっていた様子がうかがわれ、ため池はこうした水田の灌漑用として利用されていたと考えられ、このことと2号溝は関連していたものと思われる。この他3、4号溝についても水田の灌漑用としての利用のためと考えられるが、1号溝については、溝内に集石が見られた位置よりすぐ南側から西へ直角に屈曲し、消滅するため、他の溝とは性格は異なると考えられる。

中世遺物について 次に中世の遺物についてであるが、建物柱穴や溝などといった遺構が中心であるため、遺物の出土量はきわめて少なく、実測可能なものはごく僅かであった。出土遺物は土師質土器が大半で、瓦質土器、輸入陶磁器類が少量加わっているが染付類の出土はない。

長者原田迎遺跡から出土した土師質土器は、特小皿、小皿、坏に大まかに分けられる。特小皿と坏は出土数が少なく、特小皿はD区区画溝内から1点(117)、坏は円形土坑から1点(102)出土している。小皿はD区10号建物柱穴から1点(85)、B区16号建物柱穴から2点(86, 87)、17号建物柱穴から3点(88, 89, 90)、18号建物柱穴から1点(91)、4号柵列柱穴から3点(93,



第85図 中世遺構配置図と出土土器(1/1,200)(1/9)

94, 95)、円形土坑から2点(103, 104)、D区区画溝から1点(118)、2号溝から2点(121, 122)、それ以外の柱穴から4点(137, 138, 139, 140)、いずれも破片で出土している。

これらのうち、本遺跡で最も多く出土した小皿について、県内で土師質土器を出土した遺跡の報告を基にして、以下の4種のタイプに分類を行った。

- 1類(86, 88, 93, 118)底部から口縁部に向かって外反気味にのび、口縁付近で器壁が膨らみながらわずかに内湾し、端部が細くなるもの。(口径11.7cm~13.2cm)
- 2類(137, 138, 140)底部から口縁部にかけてやや内湾気味にたちあがるもの。
(口径13.1cm~14.0cm、底径8.4cmから9.5cm、器高2.7cm~3.2cm)
- 3類(89)底部から直線的にほぼ同じ厚みの器壁で口縁端部までのびるもの。
(口径11.1cm、底径6.9cm)
- 4類(139)底部から口縁部にかけて長くのびる器壁が非常に薄いもの。(口径13.0cm)

このうち1類は、安岐城跡で主体となって出土しているC系列の小皿1類と口縁形態が類似している。^(註2) この他、杵築小学校校内遺跡の皿1類、^(註3) 伐株山城跡小皿B1類とも類似している。^(註4)

2類は慈眼山遺跡(A地区)坏B1類に、3類は同じく坏B2類に類似しているが、この遺跡では1類にあたると見られる土器は出土していない。^(註5)

4 類は杵築小学校校内遺跡皿 5 類に類似している。^(註6)

これらの年代について、安岐城跡 C 系列の小皿 1 類は、大半が 16 世紀後半に比定されている他、慈眼山遺跡（A 地区）坏 B 1 類、B 2 類は 15 世紀中頃から 16 世紀中頃のものと考えられている。また、杵築小学校校内遺跡皿 5 類は、層位の検討より、皿 1 類を含む層よりも新しい層からこのタイプの土器が多く出土していることが報告されている。

以上のことから、土師質土器は重複する部分もあるが、それぞれの系譜から考え合わせると 2、3 類—1 類—4 類という順で登場してくるとおもわれる。

輸入陶磁器では、D 区区画溝出土の白磁（116）が伐株山城跡の白磁皿 G 類に該当するとおもわれる。白磁皿 G 類は 16 世紀代を中心に置き、その後半には衰退すると考えられている。^(註7)

また、3 号溝出土の白磁皿底部（124）は 11～12 世紀頃のものと思われるほか、2 号溝出土の青磁碗（123）は 14 世紀代のものと見られる。^(註8)

瓦質土器は、柱穴、円形土坑や 1 号溝中から火鉢や釜などが出土した。これらのうち、円形土坑出土のスタンプ文の鉢は、安岐城跡瓦質土器 B や弥勒寺 S D—9 出土のものと形が類似しており、16 世紀代のものと考えられる。^(註9)

長者原田迎遺跡出土の中世土器は、とくに 16、17 号建物柱穴内から出土した土師質土器小皿 1 類が安岐城跡 C 系列小皿 1 類と同じ系譜を引く 16 世紀後半頃と考えられ、また、遺跡全体で各遺構から出土した瓦質土器、輸入陶磁器の年代についても、16 世紀代のものが多く含まれることなどから、中世の集落も 16 世紀代を中心にして営まれたと考えられる。^(註10)

（註 1）宇野隆夫「井戸考」『考古資料にみる古代と中世の歴史と社会』1989

（註 2）『安岐城跡・下原古墳』大分県教育委員会 1988

（註 3）『杵築小学校校内遺跡』

（註 4）『伐株山城跡』玖珠町教育委員会 1984

（註 5）『慈眼山遺跡』A 地区 大分県教育委員会 1991

（註 6）（註 3）に同じ

（註 7）（註 4）に同じ

（註 8）玉永光洋氏より御教示

（註 9）（註 2）に同じ

（註 10）『弥勒寺』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1989